

「桃山・江戸文化の輝き」展によせて

渡辺始興筆「四季花鳥図押絵貼屏風」に
描かれる花鳥とその並び順について

渡辺始興(1683~1755)は、18世紀前期に京都で活躍した絵師です。尾形光琳に学んだと伝えられ、光琳の弟、乾山のやきものに絵付けをしていた渡辺素信が、始興と同一人物と考えられています。若い頃より狩野派の画風もよく学び、また近衛家の当主であった家熙に重用され、博物学に関心の深かった家熙のもとで、動植物の写生の技術を磨いたことでも知られています。18世紀後期になると、京都では円山応挙などが活躍し、写生を基にした絵画制作が発展しますが、始興はその先駆者といえる重要な存在です。

渡辺始興筆「四季花鳥図押絵貼屏風」(以降本作品と記述)は、2000年に大和文華館で開催された特別展「渡辺始興—京雅の復興—」の少し前に見出され、大和文華館の所蔵となりました。花鳥を描いた12枚の絵が一扇ずつに貼られた六曲一双の押絵貼屏風です。伝統的な月次花鳥図の系統に連なる作品ですが、花鳥の写実的表現には写生を善くした始興の特色があらわれています。また、全てを緻密に描くのではなく、岩や樹木は少ない筆数で鋭く描かれていたりするなど、狩野派学習の成果も発揮されています。始興が学んだ様々な表現が美しく織り合わされた、代表作の一つです。

本作品は大和文華館に入る前、まくり(表装がなくバラバラの状態)であったため、花鳥のおおよその季節や二扇ごとの構図の調和を考慮して並び順を考え、屏風に貼り付けられました。中部義隆氏が執筆された先述の特別展の図録や「美のたより」149号掲載のコラムには本作品の解説が載りますが、第1図・第2図・第5図以外は、花鳥の種類について具体的に記述されていません。そこで本稿では、全12図に描かれる花鳥を調べた上で改めて並び順について考察したいと思います。

第1図は松・梅にナベヅル。第2図は新芽の柳・菜の花にツグミ。中部氏は第2図の鳥をホオジロと記していますが、描かれている鳥の腹は、白地に短い黒の筋模様となっています。胸から腹にかけて白地に黒模様が点在するのがツグミ、全体的に淡い茶色なのがホオジロで、始興筆「鳥類写真図巻」(三井記念美術館蔵)でもそのように描き分けられているため、ツグミと考えられます。第3図は牡丹・木瓜に鳥。鳥の種類は明確に識別できませんでしたが、嘴や尾の形からアトリ科の鳥と思われます。第4図はシャガに雲雀。ここに描かれるものと類似する下から仰ぎ見た雲雀は「鳥類写真図巻」にも描かれています。第5図は筍に亀。第6図は立葵に紋白蝶。第7図

は萩・葉薄にノゴマ。第8図は枯れ葉の木・菊にカケス。第9図は黄蜀葵・穂薄にカマキリ・バクバク。第10図は芙蓉に鶯鳥。第11図は紅葉した葉をつけた木(榎?)・青い実をつけたジャノヒゲに百舌。第12図は雪の積もった梅に鶯鳥。

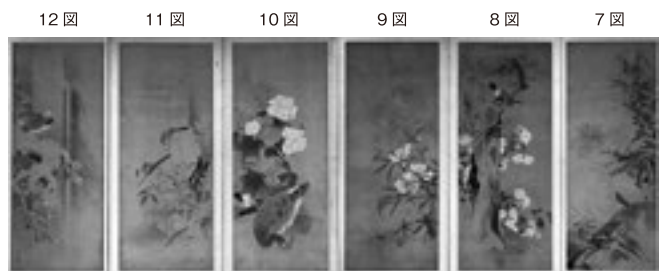
不明なものもありますが、以上のような草花や鳥虫が描かれています。比較的季节の分かりやすい草花を手がかりに並び順を考えてみたいと思いますが、その前に、草花以外の要素から並ぶ場所が分かる図があります。屏風の外側は縁と呼ばれる裏がぐるりと一周しています。縁の幅があるため、各隻の第一扇と第六扇(第1図・第6図・第7図・第12図に相当)は、絵の横幅が少し短めとなります。また、押絵貼屏風は二扇ずつのまとまりが大切にされ、印章の位置は二扇ごとに対となるように、奇数の図は右端、偶数の図は左端に捺されることが多いです。さらに本作品は、全12図のうち2つの図のみに署名がありますが、これは初めの第1図と終わりの第12図になると考えられます。本作品の第1図(署名あり、印章右)、第6図(印章左)、第7図(印章右)、第12図(署名あり、印章左)の横幅は約49.7cmで、他は約51.2cmです。横寸や署名・印章の位置から、この第1、6、7、12図は現在の位置で正しいと考えられ、草花の季節も矛盾しません。なお、署名・印章は当初のものと考えられ、現屏風に貼り付ける際に切り詰めてはいません。

続いて右隻の印章が左にある第2図、第4図に注目します。第2図の菜の花は関西では2~3月頃の開花、第4図の

シャガは4~5月頃の開花ですので、この順番で妥当です。印章が右にある第3図の牡丹と第5図の筍は、いずれも江戸時代後期の季語辞典『誹諧歳時記乗草』では初夏の季語となっているため、順番が難しいですが、牡丹と併に描かれる木瓜は晩春の季語であり、筍がいぶ成長していることから、現在の順番で良いと思います。

続いて左隻。印章が左にある第8図の菊は9~11月頃、第10図の芙蓉は7~10月頃の開花で、どちらかというと菊の方が遅く咲きます。『誹諧歳時記乗草』でも芙蓉は仲秋、菊は晩秋の季語となっています。また、始興筆「四季花木図屏風」(畠山記念館蔵)は、第一~第六扇の画面が繋がっている通常の六曲一双屏風のため、描かれる草花の順番は当初通りになりますが、秋冬の草花を描いた左隻では、菊が芙蓉より左側に配置されており、菊を季節のより遅い花としています。開花時期や季語、「四季花木図屏風」の配置などから、第8図と第10図は順番が逆なのではないかと考えます。印章が右にある第9図の黄蜀葵は8~10月頃の開花、第11図のジャノヒゲは10~11月頃より青い実をつけますので、この順番で問題ありません。

紙数が尽きたため構図について触れられませんが、草花の季節を手がかりに並び順を考えてみたところ、第8図と第10図が入れ替わるのではないかと、という個人的見解に至りましたが、いかがでしょうか。(宮崎もも)



渡辺始興筆 四季花鳥図 押絵貼屏風 大和文華館蔵

